

自然災害は天罰か？―サン・ピエールが消えた日―

酒井 智宏

1. 一九〇二年五月七日付『レ・コロニー』紙

サン・ピエール (Saint-Pierre) は西インド諸島にあるフランス領マルチニーク島の中心都市で、「西インド諸島のパリ」とも称される美しい町だった。この町の『レ・コロニー (Les Colonies)』紙が、一九〇二年五月七日水曜日、同市リセ教授で自然科学者のガストン・ランドとのインタビュ記事を一面に掲載した¹⁾。

リセの著名な教授であるランド氏が昨日、本紙のインタビュに応じ、ブレー山 (Montagne Pelée) の噴火およびゲラン工場の惨劇に先立つ現象についてお話しくださいっ

た²⁾。

対談の結果は次のとおりである。〔…〕

ランド氏の観察から、昨日「五月六日」、火山「ブレー山」の山頂付近の亀裂上にある主火口がかつてないほど活発に黄黒色の粉状物質を噴出したことが分かる。付近の谷にいる人は退避し、泥溶岩に飲み込まれないように高台に避難することが望ましい。ヘルクラネウムとポンペイはまさにその泥溶岩に飲み込まれたのであった。ただし、ランド氏は、ヴェスヴィオ山がほんのわずかな犠牲者しか出さなかったことをつけくわえている。ポンペイ市民は時間内に避難し、被災都市で発見された遺体はほんのわずかだったのである。

結論：ブレー山がサン・ピエール市民を危険にさらすこ

とはない。それはヴェスヴィオ山がナポリ市民を危険にさらすことがないのと同じことである。

(Heilprin 1903: 74-75, Zebrowski Jr.: 2002: 106-107¹ 拙訳)

そして、中面に次のような論評を掲載した。

サン・ピエールから脱出する人が増え続けている。朝から晩まで、そして夜通し、「…」荷物をもつて急ぐ人々ばかりである。「…」フォール・ド・フランス便の乗客は、ふだんは一日八十名ほどであったが、ここ三日で三百人まで増えた。

正直に言つて、われわれはこのパニックを理解することができない。サン・ピエール以上によいところがあるだろうか。フォール・ド・フランスに押しかける人たちは、もしも地震が起きたら、ここにいるよりうまくやれると思っているのだろうか。住民はこれがばかげたまちがいであることを心得るべきである。

本紙掲載のインタビュウの中でランド氏が表明した意見によつて、臆病な人たちがみな落ち着きを取り戻すことを

願っている。

(Heilprin 1903: 76-77, Zebrowski Jr.: 2002: 111¹ 拙訳)

町中が混乱していたとはいえ、このとき危険を感じてサン・ピエールを脱出する人よりも、サン・ピエールのほうが安全だと信じて流入してくる人のほうが多かった(金子 一九八八: 一五—一六頁)。サン・ピエールが安全であることの根拠として引き合いに出されたヴェスヴィオ山とはどんな山で、ポンペイ、ヘルクラネウムとはどんな町なのか。

2. 西暦七十九年八月二十四—二十五日…

ポンペイ最後の日

ナポリ湾岸のヴェスヴィオ (Vesuvio) 山麓にひらけたポンペイ (Pompeii) は、先住民族オスク人が建設したとされる都市で、紀元前五世紀頃からギリシャの支配のもとで繁栄し、サムニウム人による支配を経て、紀元前八十年にローマ帝国の都市となった⁽²⁾。さまざまな人種・宗教・文化が入り交じる人口二万人のこの都市は、とりわけローマ帝国時代に入って海外と

の活発な交易で国際都市の名をほしいままにした。輸出品の筆頭はワインで、ヴェスヴィオの山腹には三十あまりのぶどう農園があり、鎖に繋がれた奴隷が酷使されていた。

温和な風土と見事な眺望に恵まれたこの国際都市の魅惑的な姿は、まさしくローマ帝国の縮図と言ってよい。噴水のある並木大通りを馬車が行き交い、沿道には商店や劇場が軒を連ね、公衆浴場には、サウナや冷水槽、休憩室まで完備され、夜間も利用することができた。体育場(バラエストラ)の中央にはプールがあり、円形闘技場では残酷な死闘が繰り広げられた。ポンペイ式住居は「ポンペイアン・レッド」と呼ばれる鮮やかな赤色の壁によって豪華に装飾され、壁には豪華な植物やエキゾチックな鳥が描かれた。中庭には精巧な噴水が作られ、人々はそこに寝椅子を置き、横になりながら食事をとった。

ポンペイと同時にローマ帝国の都市となったヘルクラネウム(Herculaneum)は、ネアポリス(Napoli)・現在のナポリ)からポンペイに向かう街道筋に位置する人口五千人ほどのこじんまりとした風光明媚な町で、都会の喧噪を避けようとする貴族や財閥のお気に入りの高級リゾート地だった。施工技術はポンペイを上回り、二千五百名を収容する豪華な劇場のほか、ス

チム発生装置、パイプ、ボイラー室を備えた公共浴場があった。町には大理石で化粧張りされたカウンターつきのレストランが散在し、目抜き通りのデクマヌス商店街は幅十二メートルもある歩行者天国で、この通りに面した家には、白黒モザイク張りのフロア、ギリシャ神話を描いた壁面装飾、高価な木製家具が見られた。旧家のいくつかは数百年前に立てられたもので、歴史と伝統に彩られた神聖な雰囲気醸し出していた。

そのポンペイとヘルクラネウムを、西暦六十二年に大きな地震が襲う。被害は甚大で、多数の建造物が修復を断念された。この地震をきっかけにして、貴族が没落し、商人や金融業者の台頭が加速した。以降、ギリシャ時代の優美なヘレニズム様式は顧みられなくなり、芸術の俗物化が進行する。新興財閥の欲望はとどまることを知らず、奢侈への傾向をますます強めていく。

ヴェスヴィオ山が大噴火を起こしたのはそうした折であった。ヴェスヴィオ山は、およそ三千万年前に海底火山として誕生し、西暦七十九年までに、一万七千年前、一万五千年前、一万一千四百年前、八千五百年前、三千五百年前に大噴火を起こしていたが、ポンペイやヘルクラネウムの人たちの大半は、

この山が恐ろしい火の山であることを知らなかった。多数の火山が登場する大プリニウスの『博物誌』にも、ヴェスヴィオ山に関する記述は見られない。彼らにとつて、この山は、ぶどう畑とオリブ畑に彩られた美しい平和の山でしかなかったのである。その美しい平和の山が、西暦七十九年八月二十四日、周辺住民に牙を剥く。

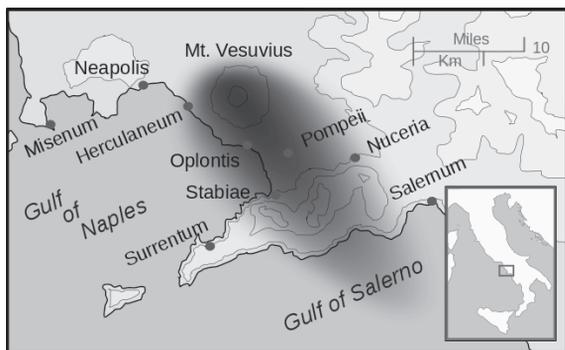
このときの大噴火については、大プリニウスの甥にあたる小プリニウスの二通の書簡が詳細に語っている。小プリニウスは当時十八歳で、大プリニウスのもとに身を寄せていた。彼らはヴェスヴィオ山から西（すなわちポンペイと反対側）に三十キロ離れたミセヌム (Misenum) という町にいた。八月二十四日の午後一時頃、小プリニウスの母親が、ヴェスヴィオ上空に異様なきこの雲がかかっているのに気がついた。大プリニウスがこの雲を間近で観察するために出かけようとしたところに、ヴェスヴィオ山麓に住むレクチナ夫人から救援を依頼する手紙が届く。大プリニウスはガレー船で救助に向かうが、軽石が降ってきたためにこれを断念し、ヴェスヴィオ火口から南東十四キロ地点にある町スタビアエ (Stabia) に向かった。しかし、彼は、翌二十五日午前八時頃にスタビアエを襲ったサ-

ジ (熱雲 *nuée ardente* の一種で、火砕流より高速で移動する灰雲) により命を落とした。五十六歳であった。

このあいだ、火口から風下方向に九キロ地点のポンペイはどくなっていたのか。この町では、二十四日の午後から、軽石が十八時間にわたって降り注いだ。降り始めから二、三時間たち、その厚さが四十センチに達したときに、家屋の屋根が落ち始めた。この時点までに避難した人たちはほぼ全員助かったと考えられる。破局が訪れたのは翌二十五日の午前七時半以降で、三度にわたるサージにより、市内に残っていた人たちは全員窒息死した。軽石の降下がいずれ収まると思つて市内にとどまつた人たちの中には、邸宅や壁画、調度品を手放すことを躊躇した富裕層の人たちがいることが分かっている。ポンペイ市内の犠牲者の総数に関しては定説がなく、人口の割の二千人程度という説から、八割の一万六千人程度という説まである (金子二〇〇一・一九〇頁)。

火口から風上方向に六、七キロ地点のヘルクラネウムはどうか。ポンペイに軽石が降り始めた二十四日午後一時の時点では、この牧歌的な町にとつて、ポンペイの災禍は対岸の火事にすぎなかった。事態が急転したのは、翌二十五日午前一時頃で、こ

のとき最初のサージが町を襲い、残っていた人を死に追いやった。その一時間後に、三倍の容積をもつ二度目のサージが起き、町をさらに破壊した。午前六時半の三度目のサージに続き、火砕流が町を完全に埋没させ、海岸線が四百メートルも西に張り出した。このとき、ポンベイとヘルクラネウムを含めて、埋没したのはナポリ湾岸の十三集落にのぼる(同…二六頁)。以後、地中深くに眠ったこれらの都市は歴史から姿を消すことになる。これらの都市が「発見」されたのは、ようやくルネサンスの時代になってからだ。十八世紀に発掘が本格化し、今日に至るまで調査が続けられている。次々に見つかる発掘物がポンベイとヘルクラネウムのものであると分かったのは、先にふれた小プリニウスの書簡があったからにほかならない。ポンベイの発掘調査では、一八六〇年代以降、空洞に石膏を流し込み、死者の鋳型を取るといった技術が用いられた。その結果、人間や犬が死に際に見せた苦悶の表情までもが再現されることになった(同…四七―六〇頁)。他方、ヘルクラネウムに関しては、この町がヴェスヴィオ山から見て風上にあつたことと、発掘された遺体が十指に満たなかったことから、住民の大半が脱出に成功したと長らく信じられていた。ところが、一九八〇年代に



西暦79年8月24―25日のヴェスヴィオ山噴火による降灰区域
(<http://en.wikipedia.org/wiki/Herculaneum>より)

なって海岸地域の発掘が開始され、一平方メートルあたり三体のという割合で合計数百にのぼる遺体が発見されるにおよび、この楽観的な見方は雲散霧消した(同…一二四―一三三頁)。
この発掘調査がなければ、ポンベイとヘルクラネウムが再び日の目を見ることはなかっただろう。しかし、ヘルクラネウムの真上二十四メートルには現代の都市エルコラーノが建設されているため、発掘が完了することはない。

以上のことから、第1節で引用した『レ・コロニー』紙の論評が史実を誤って伝えていることが分かる。二十世紀初頭の時点では、まだポンベイとヘルクラ

ネウムの発掘は十分に行われておらず、大半の市民が逃げ出して無事だったという楽観論も根強かった。しかしながら、実際には、ヴェスヴィオ山はポンペイとヘルクラネウムを一夜にして壊滅させ、史上まれに見る悲劇を演出したのである。

3. 一九〇二年五月八日：サン・ピエール最後の日

一九〇二年五月七日の朝、イタリアの小型帆船オルソリーナ号 (Orsolina) は、フランスのル・アーヴルに砂糖を運ぶために、サン・ピエールから出帆する準備を進めていた。作業は遅々として進まず、積荷はようやく半分に届くところだった。そのとき、四マイル先のブレイ山が発する激しい地鳴りと稲妻に身の危険を感じた船長のマリノー・レボッフエ (Marino Leboffe) は、積荷の完了を待つことなく、ただちに出港する決断を下した。「積荷が完了する前に出港するのは契約違反で、ル・アーヴルに着いたらすぐに逮捕されるぞ。」彼は荷主と税関の役人の脅しにも動じなかった。「私はブレイ山のことは何も知らない。だが、もしもヴェスヴィオ山がこんな様子になったら、私はナポリを出て行くだろう。だから私はここを出て行く。」(金

子一九八八：二六一―二七頁、Zebrowski Jr 2002: 84-85) オルソリーナ号と所有者を同じくするノルド・アメリカ号 (Nord America) はサン・ピエールに残った。この船は、それから二十四時間もしないうちに、百六十五フィートの海底に沈むことになる (Zebrowski Jr 2002: 85)。

同じ一九〇二年五月七日の『レ・コロニー』紙の一面トップは、第1節に引用したランド教授とのインタビュ記事ではなく、五月十一日の日曜日に予定されていた議員選挙の記事であった。一面トップに同紙が応援する候補者の名前を大きく載せ、目の悪い人でも一目で判読できるようにしたのである (ibid.: 105)。そして、火山のニュースが人々をこれ以上動揺させないように、ランド教授とのインタビュと、それに続く論評を掲載したのであった。

実のところ、「ブレイ山がサン・ピエール市民を危険にさらすことはない。それはヴェスヴィオ山がナポリ市民を危険にさらすことがないのと同じことである」という結論は、ランド教授が語ったものではなく、『レ・コロニー』紙の編集長が勝手につけくわえたものだった。ポンペイ市民の大半が時間内に避難して助かったという事実は、サン・ピエール市民もそれにな

らって避難すべきであることの根拠にこそなれ、サン・ピエールが安全であることの根拠になりはしない。⁽⁷⁾それがランド教授の本当の見解だった。そして、五月八日の午後知事を説得して、住民を避難させようと考えていたのである。

しかし、『レ・コロニー』紙の編集長にとつては、科学の論理よりも政治の論理のほうが大事であった。一町から人がいなくなれば、経済活動は停滞し、空き家を狙った略奪が起き、選挙は不調に終わるだろう。また、避難先のフォール・ド・フランスのほうも、移民を収容しきれずパンクするだろう。ゲラン工場の惨劇は、たまたまこの工場の立地が悪かったという不運によるものだ。工場がブランシュ川 (Rivière Blanche) の河口付近になれば、惨劇は避けられた。サン・ピエールの立地は悪くない。きっと泥流の直撃は避けられるはずだ。となると、自然災害の可能性よりも、社会的・政治的災害の可能性を憂慮すべきだ。マルチニークのルイ・ムテ知事も同じ結論に達したもようだ。その証拠に、サン・ピエールにやってきて住民を落ち着かせようとしている。——こうした思いから、編集長は、ランド教授とのインタビュー記事を、本人の承諾を得ることなく「プレー山がサン・ピエール市民を危険にさらすことはない。

それはヴェスヴィオ山がナポリ市民を危険にさらすことがないのと同じことである」という文で締めくくったのである。

結果として、この政治の論理はまちがっており、正しいのは科学の論理のほうであった。皮肉なことに、まちがいを正す間もなく、ランド教授は死亡した。そして、まちがいを正される間もなく、編集長は死亡した。知事も、その夫人も、みんな死亡した。一九〇二年五月八日木曜日午前七時五十分、プレー山は大噴火を起こし、摂氏七百〇千度のサージが秒速百五十メートルの速さで十キロ離れたサン・ピエールを襲ったのである。⁽⁸⁾町の時計は七時五十二分で止まった。人口約三万人の「西インド諸島のパリ」が



廢墟と化したサン・ピエール (Morne d'Orangeより撮影、Heilprin 1903: 111)

全滅した瞬間である。生存者がわずかに二名いたが、その二名にしても、重度の火傷を免れなかった。⁽⁹⁾結局、サン・ピエールに選挙の日が訪れる

ことはなかった。

二つの大災害は火山学にもその名を刻むことになる。西暦七十九年のヴェスヴィオ山の噴火のような、成層圏に届く高い噴煙柱を上げるタイプの噴火は、今日、両プリニウスにちなんで「プリニー式噴火」と呼ばれる。他方、プレー山の噴火のように、噴火と同時に熱雲が山腹を下降するタイプの噴火は、今日、プレー山にちなんで「プレー式噴火」と呼ばれる。

こうした大災害が起きるたびに、なかば反射的に次のように言わずにはいられない人たちがいる。「これは天罰だ。」最近では、二〇一一年三月十一日の東日本大震災に関して、東京都知事であった石原慎太郎がこの種の発言を行ったことが知られている。また、当時、著名人以外からも「震災は起こるべくして起きた」といった言説が聞かれた。このような人たちを天罰論者と呼ぼう。他方、「これは天罰だ」という言説に対して、なかば反射的に次のように反応せずにはいられない人たちがいる。「被災者に失礼だ。」このような人たちを失礼論者と呼ぼう。天罰論者である石原慎太郎は、失礼論者の批判を受けて、翌日発言を撤回した。

ヴェスヴィオ火山の噴火は、「快楽に現をぬかし、栄華に倦

怠を感ずることもなく贅沢に溺れていた町「IIポンペイ」(金子二〇〇一・六二頁)への天罰なのか。プレー山の噴火は、市民の安全をおろそかにし、政治に現を抜かしていたサン・ピエールの町への天罰なのか。そして、そのように問うことは被災者に失礼なのか。以下では、天罰論者と失礼論者の論争の哲学的な顛末を見届けることにしよう。

4. 災害は誰に対する天罰か

失礼論者の「被災者に失礼だ」という言説を好意的に解釈するならば、「天罰」という言葉は、被災者が何らかの悪事をはたらいたことを示唆するが、実際には、被災者の中には善良な人が多く含まれている。だから天罰と言うのは失礼だ」ということになるだろう。実際、悪事をはたらいたかどうかと被災の度合いは相関しないように思われる。ヴェスヴィオ山の噴火では、財産を手放すのを渋った富裕層だけでなく、子どもや、過酷な労働を強いられていた奴隷も多数命を落とし、鎖に繋がれてもがきながら死んだ犬も見つかっている¹⁰。

プレー山の噴火においては、皮肉な逆転現象が見られる。ま

ず、ランド教授の発言を勝手に改変し、虚偽の情報ばらまい

た『レ・コロニー』紙の編集長はサージを浴びて即死した。では、住民を避難させることを真剣に考えながら、発言を改変されてしまったランド教授のほうはどうか。これについては次のような記録が残されている (Zebrowski, Jr.: 137-138)。五月八日の朝、ランド教授は、二人の使用人と二人の学生とともに自宅の庭に座り、午後には知事と会うことを考えていた。知事に会って、ただちに市民を避難させるように説き伏せるつもりでいたのである。ただ、自宅は高台にあり、ブレー山とのあいだに大きな谷を挟んでいたため、彼は自分の身が危ないとは夢にも思っていなかった。しかし、その一時間後、被災した女性がたまたま助けを求めて駆けつけたとき、四人ともひどい火傷を負って地面に倒れ、うめいていた。彼らは水を求めていたが、水を飲み込むことができる者はいなかった。正午頃、教授は、数時間の悶絶のすえ「いったい何が起きたんだ！ 誰か教えてくれ！」と言いながら、息を引き取った。Zebrowski, Jr. (2002: 138) は、ランド教授のように何時間も苦しんで死んでいった人たちを、即死した人たちに比べて「運が悪かった」(less fortunate) と形容している。ここでは、善良さの度合いと幸

運の度合いが反比例してしまっているのである。¹⁾

だが、「天罰」という語は、失礼論者の言うように、本当に被災者が何らかの悪事をはたらいたことを示唆するだろうか。注意しなければならないのは、「これは天罰だ」という文が、それ自体では命題を表してはおらず、「これはXに対する天罰だ」において、Xの指すものが特定される必要があるということである。これは、「左にあるカップをとってくれ」という命令を実行するために、「Yから見て左にあるカップをとってくれ」におけるYを特定しなければならぬのと同じことである。話し手から見て左なのか、聞き手から見て左なのか、それともカップのそばにあるぬいぐるみから見て左なのか。このとき「何でもいからとにかく左だ」は通用しない。言語哲学では、このような性質をもつ語を指標詞 (indexical) と呼ぶ (De Recanatù 2004)。失礼論者の言説は「これはXに対する天罰だ」において「X＝被災者」であることを前提としている。しかし、事態はそれほど単純ではない。一九九五年一月十七日に阪神淡路大震災が起きたとき、リビアの指導者ムアマル・カダフィが「これは天罰だ」という趣旨の発言を行った。このカダフィの発言においては、「X＝被災者」ではなく、明らかに「X＝日本」

が意図されていた。石原慎太郎も、自身の発言は「X＝日本」を意図したものであったと釈明した。

このことから、「天罰」という語においては、「X＝直接被災した者を含む集団」と考える必要があるように思われる。しかし、この規定はなお不十分である。日本のA市で雪崩が起き、ただ一人、Bという人物が犠牲になったとしよう。このとき、「この雪崩はBに対する天罰だ」と言うことはできても、「この雪崩はA市に対する天罰だ」とか「この雪崩は日本に対する天罰だ」とか言うことはできないだろう。ここで、二つのことを考慮する必要がある。第一に、このBという人物がA市の市長であったり、日本の首相であったりしたらどうか。この場合は「この雪崩は【A市／日本】に対する天罰だ」と言うことに意味があるように思えてくる。第二に、市長または首相である犠牲者Bが、実は私の息子であったらどうか。この場合、「この雪崩は天罰だ」という発言を聞いた私は、まっさきに「X＝B」だと解釈し、「息子にも私にも失礼だ」と言いたくなるだろう。以上をふまえると、「天罰」という語においては、「X＝話し手または聞き手の最大の関心が向かう被災者（を含む集団）」などといった複雑な規定が必要となることが分かる¹²。

天罰論者と失礼論者のすれ違いは、たいていの場合、この「関心」のあり方のずれから生じる。被災者個人よりもそれを含む集団に関心があれば天罰論者になり、被災者個人への思い入れが強ければ失礼論者になるだろう。このことは、失礼論者が口にする「あなたの家族が被災しても同じことが言えるのか」という定番のクレームにはつきりと現れている。災害発生時には被災者とその家族の気持ちを第一に考えるべきだという命題を受け入れるならば、さしあたりここまでは失礼論者のほうに分があるようにも見える。

しかしながら、「Xに対する天罰」において、Xだけでなく、「天」の意味をも考慮するならば、にわかに関倒れの可能性が出てくる。

5. 「天」とは何か

「なぜプレート山は噴火したのか。」この問いに関して、天罰論者は「プレートの摩擦熱で作られたマグマが上昇してマグマだまりを作り、活動が活発化して地表まで上昇してきたからだ」といった答えに満足せず、「Xの日頃の行いが悪いからだ」と

いった答えを要求する（前節で述べたとおり、このXは複雑なプロセスを経て解釈される）。すなわち、天罰論者は、この「なぜ」を原因の問いではなく理由の問いとして解釈することを要求する。

天罰論者のこの解釈は、「天」が意図をもった合理的な存在者であることを含意する。まず、この解釈がなぜ天が意図をもつことを含意するかと言えば、一般に、理由が問われるのは意図的行為に関してであり、非意図的行為および行為でないものに関しては原因が問われるからである。たとえば、「なぜ監督はその選手に罰を与えたのか」に対しては「その選手が練習を怠けたからだ」と答えるのがふつうであり、「監督が短気な性格だからだ」と答えるのはふつうではない。逆に、「なぜ監督は何度も寝言を言ったのか」に対しては「チームが弱いのでストレスがたまり、眠りが浅かったせいではないか」などと答えるのがふつうであり、「隣で寝ている妻に言いたいことがあったからだろう」と言えるためには、寝言が何らかの意図的行為であるという想定が必要になる。同様に、「なぜ桜が咲いたのか」に対しては「春になったからだ」と答えるのがふつうであり、「人々が花見をしたがっているからだ」と言えるためには、

開花が桜の意図的行為であるという想定が必要になる。次に、上記の天罰論者の解釈がなぜ天が合理的であることを含意するかと言えば、一般に、理由はその正当性を問われるからである。野矢（一九九五・一八三頁／二〇一二・二六四頁）の言うように、「なぜ何も食べないんだ」と尋ねられ「天気がいいからね」と答えたり、『信号が赤なのになぜ渡るんだ』と尋ねられ『君がクシャミをしたからだ』と答えるのでは、理由の説明になりはしない。」以上のことから、天罰論者の言説は、「天」が意図をもつ合理的な存在者であるという想定のもとにあることとなる。

では、この意図をもつ合理的な存在者としての天とは何か。真つ先に思いつくのは「神」であろう。近代自然科学の祖とされるニュートンも、自然法則の背後にその創造者としての神が存在することを信じて疑わなかった。「天 \equiv 神」とすると、天罰論者の言説は「神が悪事をはたらいたXに罰を与えようとして災害を発生させる」というものになる。だが、ここには十八世紀のフランスで教会批判を展開した哲学者ドルバックの言う「擬人神観」が見られる（D'Holbach 1770: 邦訳Ⅱ一〇三頁）。悪事をはたらいたXに罰を与える神の姿は、練習を怠けた選手

に罰を与える監督の姿と変わるところがなく、神は人間の原理に従って行動していることになる。ここで、なぜ人ならぬ神が人と同じ原理で行動しているのかという疑問が生じる。一般人でないものは、人とは（部分的あるいは完全に）異なる原理で行動する。たとえば、ガス漏れ警報機は（仮に彼が意図的に行動するとして）ガスにのみ反応し、それ以外のものにはいっさい関心を示さない（山口二〇〇五：一五三頁）。生態心理学ふうによれば、ガス以外のものはガス漏れ警報機のいかなる行為もアフォードしない（cf. 河野二〇〇三）。それなのに、なぜ神が人間と同じように人間に罰を与えるのか。なぜ人間界の出来事が神の行為をアフォードするのか。天罰論者は、自分を含めた人間の行動原理を神に投影しているだけではないか。こうした疑問に答えなにかぎり、「災害は天罰だ」という言説は何も語っていないことになる。

この疑問は、ウイトゲンシュタインの規則のパラドックスをめぐる議論（Wittgenstein 1953: §185-188）によって補強される。教師が「○から順に二を足してごらん」と言う。生徒がそれに従う。「○、二、四、六、八、…、一〇〇〇、一〇〇四、一〇〇八、…」
「違う！ 一〇〇〇を過ぎてても同じようにやるんだ！」「え？

同じようにやってみるんですけど。『二を足す』ってこういうことじゃないんですか？」「ちがうちがう、きみは一〇〇〇を過ぎてから四を足しているじゃないか。一〇〇〇に二を足せば一〇〇二だろう？」「え？ 一〇〇〇に二を足したら一〇〇四じゃないですか。先生、何言ってるんですか。」この子は決して計算をまちがえているわけではない。ただ、「同じようにやる」ということに関してわれわれとは異なる行為本能をもっているだけである。われわれと同じように「二を足す」ことができるのは、われわれとおおむね（つまり、計算まちがいを指摘されたときにそれを計算まちがいと認識できる程度には）同質の行為本能をもった者だけである。これは足し算に限ったことではない。世の中のあらゆる規則は、行為本能の一致のうえにのみ効力をもつのである。行為本能という支えを失えば、算数も、法律も、ことばの意味も、いつさいが成立しなくなる。これが規則のパラドックスである。このパラドックスの意義は、人間が広大な論理空間のほんの一部にしかすぎない行為空間に生きていることを明るみに出したことにある（野矢二〇一一：第一章および第一三章）。規則に従った実践をひらけるのは、狭い行為空間に生きる人間だけであり、あらゆる

論理的可能性を均等に考慮する神のもとでは、規則は失効するのである(同・第一三章および第一五章)。神にとつては、「なぜ何も食べないんだ」と尋ねられて「お腹がすいてないんだ」と答えるのも、「天気がいいからだ」と答えるのも、等しく合理的となる。なぜならば、神の前には、「お腹がすいていなければ何も食べない」という法則も、「天気がよければ何も食べない」という法則も、同等の論理的地位をもつてひらかれているからである。それなのに、なぜ神が人間の行動原理に従って悪事に罰を与えなければならぬのか。ここには、明らかに、神に人間の姿を投影する擬人神観がある。「卓抜なニュートンも自然学と明証を捨てて神学という想像の領域に迷い込むと、もはや一人の子供でしかないのである。」(D'Holbach 1770: 邦訳Ⅱ九七―九八頁)。

「神は意図をもった合理的な存在者であり、その意図と合理性でもつて、悪事をはたらく者に罰を与える。」天罰論者のまぢがいは、この言説に現れる「合理的」という語が指標詞であることを見抜けなかったことにある。人間の行為空間の外には広大な論理空間がひらけている。それゆえ、人間にとつて合理的なことも、神から見れば数ある可能性のうちの一つにすぎない。

い。それこそが規則のパラドックスの教えることである。

そこで、ドルバックにならつて、人間もどきの神を退場させ、自然現象を自然そのものの論理で捉えることにしよう。「自然は「神による」制作物ではない。自然は常にそれ自身によって存在してきたし、自然の懐でこそすべてがなされるのである。」(D'Holbach 1770: 邦訳Ⅱ一〇六頁、強調は原文による。)ドルバックによると、自然の本質は運動であり(Hol: 邦訳Ⅰ三六頁)、神の観念はこの自然の中に回収される。「君が神と名づけてよく知っているつもりの方の方は、運動を本質とする大いなる調和のエネルギーにはかならず、実際、それは時間の中で働き、空間を満たす物質にはかならないのだ。」(Hol: 邦訳Ⅰ一三頁)このドルバックの思想は「神による自然の創造と支配を教え、物質は外力が加わつて初めて運動すると説くキリスト教会に真っ向から挑む」(秋吉二〇〇七・四六頁)ものがあった。

「…」一八世紀のフランスで、この「物質のエネルギー」という表現は、それ自体が画期的な思想的事件でした。それは、物質の運動の原動力を物質そのものの内部に位置づ

けることで、神と袂を分つ新らしい「ママ」思想として、まさにドルバックらによって打ち出されたものなのです。

「…」 「物質のエネルギー」が主張される以前、「エネルギー」とは「神の御言葉」のように、聞き手や世界そのものを動かす「言葉の力」のことだったので。「…」だとすれば、彼らは「物質のエネルギー」と言うことで、物質をも動かす神の言葉から「エネルギー」を奪い取ったということになるでしょう。サドが「自然のエネルギーについて知れば知るほど、神の無用さを確信する」「…」となんの説明もなしに断言するとき、こころした奪取の思想抜きで理解することはできません。(秋吉二〇〇七・四六―四七頁)。

ドルバックの言う意味でのエネルギーの概念に基づくならば、人間の生死とは、物質のうちにあるエネルギーによる物質の結合と解体にすぎない(秋吉同・四九頁)。「人間を含むあらゆる存在は」特殊な形態でしばらく存在した後、自分の崩壊によって他の物質を生産することに寄与させられるのである。」「(D'Holbach 1770: 邦訳Ⅰ五二頁)「人間を含むあらゆる」存

在の変形と解体は自然の保存にとって必要であり、それは私たちが自然に割り当てうる唯一の目的であり、自然はたえずそれを目指し、自然に従属するあらゆる存在の破壊と生成によって間断なくその目的を追求し、それらの従属する存在は自然の法則を受け入れ、大いなる全体にとって本質的な積極的活動の維持に、それなりに協力せざるをえないのである。」(ibid.: 邦訳Ⅰ六〇頁)

無神論的唯物論と呼ばれるこのドルバックの思想によれば、自然の中で生じるある種の物質の結合と解体、およびそれともなうある種の変形と解体を、人間が「災害」として意味づけているにすぎない。人間の側の都合で意味づけされたにすぎない現象を「天罰」などと称されては、自然(≡天)もい

い迷惑だろう。

6. 自然は飽きている

十八世紀〜十九世紀のフランスの作家サドは、無神論的唯物論を、提唱者であるドルバックが思ってもみなかった議論に援用する。殺人の正当化である(秋吉二〇〇七・四三―六三頁)。

サドによると、殺人とは、すでに存在する物体を解体し、自然に新たな創造の機会を与える有用な行為であり、殺人者とは、自然の意思を遂行する道具にすぎない。この観点から、サドは、親殺しよりも下に向かって家系を断ち切る子殺しを推奨する。サドはさらに、自然がすでにできあがったサイクルに飽きており、災害とは自然が飽きていることの証拠の一つにほかならないと言う。「…」自然は災害によって我われを押しつぶし、対立や不和の種をまき、殺人願望を吹き込む。戦争や飢餓、ペスト、数多くの極悪人の存在というのは、この法から逃れ、すべてを破壊しつくして新たな存在をほとばしらせたいという自然の願望の現れである」(同…一五八頁)

こうしたサドによる殺人の正当化は成功していると言えるだろうか。いや、成功していないように思われる。この議論を通じてサドが示したのは、「人間が自然の論理に従うかぎりにおいて殺人は推奨される」ということにすぎない。自然の論理に従うことを拒否した人間にとっては、殺人は正当化されないのである。ここで決定的に重要なことは、逆に、自然が人間の論理に従う必然性もないということである。天罰論者の「自然災害は天罰だ」という言説は、この点を見落とし、自然が人間と

同じ論理で動いているということを前提としたものにほかならない。失礼論者の「天罰と言うのは被災者に対して失礼だ」という言説は、この前提を受け入れてはじめて成り立つものであり、ここにおいて、失礼論者は天罰論者と同じ土俵に立ってしまっている。

「自然災害は天罰だ」という言説は、被災者に対して失礼である以前に、自然に対して失礼であるように思われる。どうしても自然が人間の悪事を悪事と認定し、裁かなければならないのか。人間のあいだでさえ、「悪事」を含め、語の意味が共有されていると考えるのは幻想にすぎない(酒井二〇二二)。それなのに、なぜ自然と自分のあいだで言語が共有されると思うのか。この点で、「自然災害は天罰だ」という言説は、人間の言語が生み出した幻想の一つと言ってよい。われわれの思考の大半は言語によってはじめて可能になる(Orwell 1949)¹³。そうした思考の中には、災害の理由を探し求めようとする思考も含まれる。

いつか富士山が噴火する日が来たとき、まだ言語が、すなわち人間が存在するならば、ありもしない噴火の理由を探し求める天罰論者が現れるだろう。そして、その態度をたしなめる失

礼論者が現れるだろう。そこには言語に隸属する人間の姿がある。噴火の原因は自然界に属しており、人間が消滅しても存在し続ける。しかし、噴火の理由は人間とともに消滅するにちがいない。

注

- (1) ただし二面トップではない。これについては第3節で述べる。
- (2) グラン工場 (Usine Guerin) の惨劇とは、同年五月五日にブレー山の火口壁が壊れ、製糖工場が高温の泥流に飲み込まれた事件をさす(金子一九八八:一五)。
- (3) 本節の記述は金子(二〇〇一)およびBBC(2003)に基づいている。
- (4) 震央はヴェスヴィオ山付近で、この地震はその十七年後の大噴火の前兆であったと言われる。
- (5) ヴェスヴィオ山は、西暦七十九年以降、八十一回の大小の噴火を繰り返している。一八八〇年、山麓から火口までの登山列車が営業を開始した。そのコマ・シャルソングとして作詞・作曲されたのが有名な「フニクリ・フニクラ」で、世界最古のコマ・シャルソングと言われる。「フニクリ・フニクラ」は今日まで世界中で歌い継がれているが、この曲が宣伝していた登山列車のほうは、ムッソリーニ政権時代の一九四四年の噴火によって破壊され、営業を終了した。以後、ヴェスヴィオ山は不気味な沈黙を続けつづける。
- (6) 本節の内容はZebrowski Jr. (2002: Ch. 7, Ch. 9) に基づくことである。
- (7) 上述のとおり、ボンベイで死者がほとんど出なかったというのは誤りで

あり、実際には多数の人が命を落としている。とりわけ、体育場(バラエストラ)と呼ばれる施設からは百を越える遺体が発掘されている。

- (8) 何の慰めにもならないが、『レ・コローニ』紙が発表した楽観的予測のとおり、火砕流の本流はブレー山の南側の谷川に沿って海に流れたため、サン・ピエールを外れた。しかし、そこから舞い上がった高温の灰と火山ガスを含むサージがサン・ピエールを直撃したのである(金子一九八八:二九一三〇頁)。

(9) Zebrowski Jr. (2002: 139, 260, 267) によると、フォール・ド・フランスの病院には、この日の噴火とそれに先立つ災害による負傷者百五十一名が収容されていた。このうち四十名がすぐに死亡し、最終的に回復したのは六十九名であった。この六十九名は全員が壊滅地域の外にいた人たちである。壊滅地域内にいながら助かったことが確認されているのは一名で、下の独房につながれていた囚人オーギュスト・シバリ(Auguste Ciparis)であった。彼は四日後に救助されたときには正視できないほどのひどい火傷を負っていたが、奇跡的に一命を取り留めた。その後、「サン・ピエール唯一の生存者」としてサーカスに出演するなどし、一九二九年に亡くなった(金子一九八八:一九一―二頁およびZebrowski Jr. 2002: Epilogue)。なお、生存者の数と生存の経緯については資料により若干の違いがある。いずれにせよ、市内にいたほぼ全員が死亡したことは確かである。

- (10) ただし、ヘルクラネウムでは、犬、猫、ネズミなどの小動物は一匹も見つかっていない。危険を察知して逃げ出したものと推定される(金子二〇〇二:一三四)。同様に、ブレー山が噴火した時点で、動物たちは山から去っていた(金子一九八八:二七―二八頁)。

(11) このほか、一七五五年のリスボン大震災によって罪のない多数の人が犠

牲となったことを受けて、十八世紀フランス啓蒙思想の哲学者ヴォルテールは、「現実世界はあらゆる可能世界の中で最善のものである」とするライプニッツの最善説に異議を唱え、ピカレスク小説『カンディード (Candide)』を著した。今日の失礼論者であれば、「最善説は被災者に対して失礼だ」と言うかもしれない。

(12) 一九八五年十一月十三日に発生したコロンビアのネバド・デル・ルイス山の噴火は、二万人を超える死者を出したが、そのうちの一人が、オマイラ・サンチェスという十二歳の少女であった。彼女は身動きが取れず、泥水に首まで浸かりながらカメラに向かって助けを求めているが、六十時間に及ぶ救出活動もむなしく、息を引き取った(金子 一九八八・三三二―三三三頁)。このとき誰かが「天罰だ」という発言をしちゃうものなら、「X」は「コロンビア」などではなく、真っ先に「X」オマイラ・サンチェスと解釈されてしまい、「オマイラちゃんに失礼だ」という言説が巻き起こったにちがいない。このことは、Xが聞き手の関心のあり方に応じて解釈されることを示している。

(13) オウエルの小説『一九八四年』(Orwell 1949)には、現代英語の語彙を大幅に削減し、かつ意味を限定した「ニュースピーク」という架空の言語が登場する。ニュースピークでは、現代英語で表現することのできた思考の大半を表現することができない。この言語を用いるかぎり、可能な思考の範囲が確実に狭まっていく。そして、それこそがこの言語を開発した党の狙いである。

参考文献

秋吉良人(二〇〇七)『サド―切断と衝突の哲学』白水社。
BBC(2003) *Pompeii: The last day*, 二〇〇三年一〇月二〇日放映ドキュメン

タリ。

D'Holbach, Paul-Henri (1770) *Système de la nature ou des lois du monde physique et du monde moral*. 高橋安光・三宅徳嘉(訳)『自然の体系』(一)

(二) 法政大学出版局(一) 一九九九年、(二) 二〇〇一年。

金子史朗(二〇〇一)『世界の重大災害』中公文庫。

金子史朗(二〇〇二)『ボーンベイの滅んだ日』東洋書林。

河野哲也(二〇〇三)『エロジカルな心の哲学―ギブソンの実在論から』勁

草書房。

Heiprin, Angelo (1903) *Mont Pelé and the tragedy of Martinique. A study of the great catastrophes of 1902, with observations and experiences in the field*. J.B. Lippincott Company.

野矢茂樹(一九九五/二〇一一)『心と他者』勁草書房、一九九五年、中公文庫、二〇一二年。

野矢茂樹(二〇一一)『語りえぬものを語る』講談社。

Orwell, George (1949) *Nineteen eighty-four*. Secker and Warburg. 高橋和久(訳)『一九八四年』早川英文庫、二〇〇九年。

Recanat, François (2004) *Literal meaning*. Cambridge University Press. 今

井邦彦(訳)『ことばの意味とは何か―字義主義からコンテクスト主義へ』

新曜社、二〇〇六年。

酒井智宏(二〇一一)『トートロジの意味を構築する―「意味」のない日常

言語の意味論』くろしお出版。

山口裕之(二〇〇五)『人間科学の哲学―自由と創造性はどこへいくのか』勁

草書房。

Wittgenstein, Ludwig (1953) *Philosophische Untersuchungen*. Basil

Blackwell. 藤本隆志(訳)『哲学探究』(『ワイトゲンシュタイン全集』8)。

大修館書店、一九七六年。

Zebrowski Jr., Ernest (2002) *The last days of St. Pierre: The volcanic disaster that claimed 30,000 lives*, Rutgers University Press.